回顧四十年

中川校長
岩川教授
關根教授
槇山教授
藤井教授
下田教授
小林教授
中島（信虎）教授
土屋教授
近藤教授
なにがし

佐方鎮子氏
後閑菊野氏
安井哲氏
淺石ゑ氏
西島壽氏
岡田つる氏
馬上ゐづ氏
飯沼ヨイ氏
池田キヨ氏
星トミ氏
鹽川勤氏
竹田ちよ氏
小田安良氏
千葉ミツ氏
坂内ヅヤ氏
栗本しづ氏
大瀧晴氏

此度本校の開校四十年、分立廿五年の記念に際しまして、文科會は、この光輝ある喜びにちなみ何か致したいと考へまして、ふと思ひつきました事は、本校の先生方をはじめ卒業生の方々の記念日についての御感想なり、その當時の御思出なりをうかゞひまして、これを誌上にまとめましたならば、勢そこに、我光榮ある母校の過去四十年間に於ける、面白い歴史の一面が表はれはしまいかと考へた事でございます。何分にはかの思ひ立ちてございましたので、隨分無理な御願を致しました次第でございますが、御せはしい中を或は御話し下され、或ひは御書き下さいまして誠にありがたく、こゝに謹んで厚く御禮を申上げます。其の上時日にゆとりがございませんでしたために、御話をうかゞひましたばかりでは不本意なから一々草稿の御訂正を御願ひいたす事が出來ませんでした故、不十分な點誤謬の點が多からうと存じまして御話し下さいました方にも御讀下さる方にも誠に恐縮に存じますが何卒御ゆるし下さいます樣御願ひ申し上げます。なほ言ふまでもなくこれ丈ではほんの一部分に過きないのでございます故、この項は是非次號へも繼續いたし度いものと存じて居ります。何とぞ贊助員の方々には盛に御投稿下さいます樣改めて御願ひ申上げます。(大正四年十二月十七日文科會編輯係)

回顧四十年

中川謙次郎

私は明治十四年の夏學習院から轉じて來た。受持學科は物理、化學、鑛物なぞであつたがまもなく教場幹事(校長の事務をたすくゝになつて朝から晩まで學校につめきつて居たので隨分人に嫌はれたものである。とにかく女の生徒に接するのははじめてなので最初の間は頗る丁寧に取り扱つたので、生徒から中川先生は御辭儀をする先生だと言はれたといふことである。言葉なぞも勿論改めた。試驗いちめと云ふ點ではきらはれた樣であつた、その頃は臨時試驗と言うて時々豫告なしにする樣になつて居たが、生徒がふいの試驗丈はよしてくれる樣に、他の先生はたいていめくばせ位がある故先生のも全くの暗うちではこまると言ふて來たかそれ丈は遂々きかなかつた、それに答案には一々點數をつけて返したので、時によるとこれとこれと二點ちがふがそれはどう云ふ點から來るかなぞと二つの答案をつきつけられて閉口した事もあつた。そんな時には教師のむつかしさを痛感した。

化學を受持つて居たので實驗する事が大切だと思つたが、その頃はまだそれだけの設備がなかつたのでそれらの準備を追々にして課外にさせた所が、それがまた一部生徒に不評判で誠に困つたが、教師になるには是非自ら實驗をしてみないと困ることがあるから是非出てくれればこまると言つては居たが、普通の着物のまゝにはかまはなく、只すこし大きな前掛位で藥品を扱ひ硝子切りなどをする事故この頃の女子としてはさぞ迷惑であつたらう、併し、非常によろこんで居る人達もあつた。十八九年頃の事かと覺思ふが彼の鹿鳴館時代と云ふて西洋風の大浪が非常な勢で押し寄せて來た、ことに舞踏が盛で學校でももとの第二講堂で盛にせられた、私は元來西洋風の教育を少く受けて外國語なぞも是非しなければならぬと言つて居たが、これ丈はどうしてもする氣になれず、毎日第二講堂の後の室に晩くまで居るのか常であつたが、その日丈はいつも早く歸つてしまつた、その日になると男女の先生をはじめ外から來られる御客さへあるほどであつた、一体女の先生方は教育の上からどんなに考へて居られるのかと思つて舍監室へいつて話した所が山川先生も自分と同意見で「どうもあれ丈はする氣がせぬ」と言つて居られた。こんな具合でこれが追々教育界にひろまつたならばその結果がはたしてどうかなぞとひそかに考へて居つた所、世の風潮が代つて歐化主義の反動が起り、道德の主義方針を示す事を要求せられ舞踏なぞも漸々下火になつて來た。私はむしろ自分の修めた學問なぞの關係から西洋かぶれの方であつたが、これ丈はどうもする氣になれなかつたがこれは自分の一つのくるしい經驗であつた。

男女の高等師範が一緒になつて男子部女子部となるについて、大分むつかしい事になつてこれまで女子の方につとめて居た人なぞでほかへ行つた人も大分あつたが、遂自分は引きつゞいてこゝにつとめる事になつた、今から思へは一生の内最も考ふ可き時であつたが餘り考へもせず、又、特に策を用ゐると云ふ樣な事もせずに過した。その時非常に迷惑したのは受持學科のことであつたが、全く專門外の英語や教育をどうでも持てと言はれた。ことに教育なぞは全

く自分獨丈の修養としては隨分興味をもつて讀みもしたが、とても教へる事が出來る樣な研究はしてなかつたのを、生徒か教科書を以て居るからと云ふので止むを得ず教壇にだけは立つたが、生徒もさぞおかしかつたらうと思ふ。併しやがて專門の人が來られたので二三回で止すことが出來た。こんな風で自分に出來もせぬ學科などをしひて持たされると云ふ樣な點から、此の頃は自分の一生の內で、精神上に於て社會的の不安時代であつた。つまり自分の氣にくはぬ事を學校が無理にさせると思つたので、一層のこと他に道を替へ樣かなど、考へたのである。で應用化學の方を研究して居たので工業方面の事を爲て見ようとも考へ、又、化學の著述などをも試みようと思つて人と相談して見たりしたところから、私人として教科書編纂の事に關係して同志の者と共に每日學校から某書林の編輯所にまわつて居た。ところがその爲めに非常に責められて、とにかくその方をすつかり止めるか、學校の方を辭職するかちどちらかに決める樣にと言はれたので、從來の自分の考を悉く話し、又學校の眞意のある所も解つたのでそのまゝ學校にとゞまる事になつた。一方この樣な具合ではあつたが、學校の教授の方は非常に愉快に出來た生徒もよろこんで勉强したし、實驗の方などもう思ふ樣に出來る樣になつて居た。

後男女分離する時は再び女子の方に屬する事になつて、幹事といふ役を兼任した、これは校長の事務を補佐するので、時の校長中村敬宇先生のもとに長く引きつゞいてつとめて居た。その頃は學科の方は化學丈で一週十時間以內だつたので、多く事務に關係して書記長の樣な事をして居た、この間約十年ほどであるがはじめ入つた時から見ると生徒の學力の程度などよほどちがつて來た。學科は大体講義となり、實驗もその頃はもはや正課になつて生徒もすゝんでする樣になつて。教師の手こたへある生徒として教育することが出來る樣になつて、非常に教授上愉快を覺えた。

服裝の事についてはだん〳〵と變遷があつたが、その內に袴の問題があつた、元來自分は洋服か和服に代る時も、日本的洋服を主張して極力和服に反對したが時勢には勝てず遂々日本服になつたが、後また袴の採用の適否が問題になつた時は、まだ華族女學校、跡見女學校等で用ゐて居た頃であつたが、自分は、貴族のまねをする此學校がし、從つて地方かまた此學校のまねをする樣な事は絕對に反對であつた、自分は「ノツペー」樣のものを試みるか、又は廣い前掛を襞をとつたらなどと思て居たが、私がこゝを去ると間もなく採用され全國に非常な勢でひろまつたのを見て、自分一人で反對して居た事が大變に異た樣な氣かしたか決して惡氣でしたのではなかつた。

校長は中村先生、細川先生、秋月先生から高嶺先生になつた、長い間不十分ながら校長事務補助の樣な地位にあつて微力を盡して居たが高嶺先生の時代となつては自分の此校に在ることを要なきことゝ思ひ辭意をかたくしたが、容易に當局の許可なく辭表を懷にして數ヶ月を過し漸く高等師範と、高等工業とに轉任と云ふ事になつて一時こゝを去る事になつたのである。

この間に於ける生徒かたぎとでも云はうか各時代の生徒の氣象はそれ〳〵變遷がある。はじめ頃の生徒は、非常に元氣でさつぱりして居て無遠慮で、一体に偉ひ權幕で鼻先の强い氣象か見えた。ところか二十年後邊かとも思ふが御てんば退治と云ふ語かしきりに流行

つた、學校なぞても講堂訓話の折なぞさう云ふ事が話された事もあつた位で、一体に非常におとなしくしなければならぬ樣になり、幾分か人前を作つて自分を露出せぬ樣になつたので、何んだか生徒の氣質が一向教師にわからないなどゝ言ひ合はれる樣になつた。三十一年頃になると生徒の學力と共に女子としての價値か追々あがつて來たが、これは廿五六年頃からの傾向で、漸次に强みあり確した所のある表裏のない生徒になつたと思ふて居る。女子の獨立なぞと云ふ事を盛に考へ、又は話し合つた時かあつたといふ事であるか自分にはその女子の獨立の意味かよく解らなかつた。女權とか男尊女卑とか言ふ樣な言葉の盛に用ゐられた時代かあつたかそういふ影響を受けた事もあつて、生徒か別に集會を催すなどゝいふ事もあつたときいて居る。現在の生徒の事についてはかう云ふ位地に在ると勢はつきりと知る事は出來ぬ之を最深く遺憾に思ふが全く自分の微力の爲であると考へれば恐縮の至である。（筆記）

□

岩川友太郎

私が、東都に勤學を志して東奧の鄕里弘前を出ましたのは、明治七年の一月元旦であつて、本校の創立も遇然同年でありますから、今度の四十年記念といふ語は、私の腦裡に深く且つ鋭く響きました私が、本校に初めて教鞭を取つたのは、明治十八年の九月、故那珂博士の校長時代でありました。最も本校の教諭に任ぜられたは二十三年四月であつて夫れ迄は隣りの高等師範當時の東京師範學校から兼務して居たのであります。二十三年本校の男子と分立せる際、私は女子高等師範學校教授に任ぜられて、高等師範の方は兼任でありました所、翌二十四年には高等師範の方が本官と成つて此方は兼務と成りました。夫れから三十一年本官を免ぜられて本校教授の專任と成り、本校の教壇に立ちて以來最早三十年にも成りて校の內外を問はず幾多の變遷に遭偶しましたから、回顧すれば所感交々至りて二十分や三十分では到底語り盡くせません、併し强いて摘要して申せば

社會文化の進步と女子教育の猛展でありませう、當時學問する女子は一口に生意氣と稱され、驚異の眼を以て迎へられたものであります。從て女子が修學上少しく世の耳目を惹くような事があらば直ぐ新聞に書き立てられる、又男子は妻を迎へんとするにも學識のある女は眞平御免、學問は無くとも家事上に多少の心得があれば結構といふのが世間一般の風習であつたやうであります。

私の擔任する博物の教授上には、動植物の採集が甚だ必要でありますが、然るに明治三十年後に至る迄は、女子の學生が銘々に採集器を提げて市中を通行することを能ふし得なかつたし、學生もこれを敢行する勇氣を持たなかつたのであります。然るに大正の今日では如何なる採集器を携へて市街を濶步しても誰も怪みもしませんし、且つ彼は蟲を捕る網、是は植物の採集嗣籃であることをも世間の人が心得て居るように成りました。又父母が息子の爲に嫁を搜すにも昔の樣に學問のある女子を避くる所でない、少なくも高等女學校位を卒へて居なければ歡迎せられぬようになりました。

前申した樣な社會では、博物の如きは兎角迂遠な學問と看做され獨り世間のみでなく學校の教科目の中でも眞に幅の利かない學課と

認められたような風がありました、是も無理とは思ひません、大學出身の者が師範學校で始めて博物學を講じたのは明治十四年で私共が其の卒先者といふ世の中でありましたからネ。それで色々の奇談もありますが、明治二十一二年の頃、本校に増田貢といふ漢學の先生が居られて一時私と同じ教場で經書の講義をすることに成つて居りました。然るに一日私が生理の授業を終へ、人間の蓋骨を机上に殘し置きました所へ、次の時間の先生が來られ、これを見て斯かる不淨な室では經書の講義は出來ぬと言はれ、且つ其の上に彼の岩川といふ男は始終蟲を殺したり、蛙を屠つたりし居るが、行末は祿な死に目に逢はぬだらうと言はれたさうであります。

斯かる狀態でありましたから、當時の世間一般の智識の程度は御推察が出來ようと思ひます。從て當時の學校の施設は萬事世間よりも遙に進み過きて居つたように感じましたが、三十年後の今日では學校と家庭と智識の程度に於いて大した差等を見ないやうであります、我が邦の文化がそれ丈進んだ譯でありますが、私の如きは其の進歩を漸次目擊し來つたのでありますから、豹變したものとは想ひませんが、昔を顧ると實に驚くべき程進歩の跡を認むるのであります。

最後に師範教育に就て常に感じて居ることを一言附け加へます、本校生徒定員は元と僅に一百名であつた爲に教官と生徒との間柄は眞に親子の關係と同樣で、御互に性格をも能く知り、意志が能く疏通して居ましたから、學問を教ゆるばかりでなく、眞の訓育が出來たと信じます。今日の樣に三百四百と成つては、教は出來るとしても育の方が甚だ覺束ないと感じます。昔に較べて萬事進歩したに相違ないが、此の點のみは遺憾に思ひます。

□

關根正直

記念式は大抵廿年とか三十年とかいふに四十年とは妙な年期を祝したものだといふ人もありますが、今回のは御承知の通り女子高等師範となつて、獨立してから廿五年になる方が主で、それに開校から四十年に至つたのと重なりましたから、四十年廿五年と一つに記念したわけです。

三十年記念式の時にも、私は在職しました、記念繪葉書を始めて造りましたが、其時はまだ敷地も今のやうに擴からず、校舍も舊のまゝで手狹く、且修繕中でありましたから、別段今回のやうに盛んな式も擧げず、勿論、貴賓を請待も致しませんでした、卒業生諸君から文庫の寄附などがありまして、今も閲覧室に在ります、御覧の通りです。

三十年記念の年から數へても、既に十回の卒業生を出してゐる、回顧すれば、私は本校規則を改正して、文科理科と二科に分けられた時から奉職してゐて、文科卒業生も國語專修科の卒業生も、第一回から皆になじみです、實に御尋れに預かれば文科にも專修科にも尤も深い御緣のある者の一人であるが、偖感想如何と尋ねられると甚だ慚愧に堪へない、女子徒育とか國語教育とかいふ事には何の抱負も主張もなく、うか〳〵と徒らに教室に出入し來つたのみで何等學校に對して成遂の跡なく、生徒を利益した事もないのは、今更ながら深く恥入る次第です、幸に本校所定の學科課程が良い鹽梅に配

濟してあるから、他の學科の補助を得て其方の力で卒業生諸氏も活いて居られるのです、誠に言譯がないと申しておきます。

□

槇山榮次

此度我校は開校四十年分立二十五年の記念式を行つて可なりのさわぎをしたのであるが、是は一体何の爲であらうか。女子教育の中心とも云ふべき我校が段々と年所を經て益々隆運に向ひつゝあるのを祝賀して將來の發展を祈る爲であると云へばそれだけのことであるが、教育を目的としてゐる學校の仕事としてはもつと深長なる意味を有するものとして考へなければならない。余の見る所を以てすれば學校で斯樣な記念式を行ふのは其職員たり生徒たる者をして其學校に對する責務の自覺を强めしむることを以て主眼としてゐると思ふ。

我校は畏くも昭憲皇太后の特別なる御眷顧を蒙り、幾多先輩の經營を經て以て今日の隆昌を致したのである。此事は我校の職員たり生徒たる者のよく了得してゐる所である。併しながら人間の心氣は時に之を振作して進歩發展の氣勢を開くことが必要であるから、四十年二十五年と云ふやうな極まりの宜い時期を割して茲に我名譽ある學校に對する責務の自覺を高めることにせられたものと解釋しても差支ないと思ふ。

今回の記念式に依て我々は確に學校に對する責務の自覺を高むることが出來た。生徒諸子も定めし同樣の感に打たれてゐらるゝことと推察する。かしこくも博恭王妃經子殿下には　皇后陛下の思召を以て、親しく記念式に臨ませ給ひ、令旨をさへ賜はりて、皇后陛下が昭憲皇太后の遺範を紹述し給ひ女子教育の事に御心を注ぎて更に將來の大成を望ませ給ふ御事を諭し給はつた。我校の職員たり生徒たるもの何人でも其責務の甚重大なるとを感ぜざるべからざる次第である。今や御大禮に依て我々は　天皇陛下の臣民として將た日本帝國の國民としての自覺を大に高めた譯であるが、之と同時に我校四十年記念式に依て名譽ある學校の職員又は生徒としての自覺を更に高めるやうに成つたのは寔に悦ぶべきことである。併しながら唯自覺を高めたと云ふだけではまだ最後の結果に到達したものと稱することは出來ない。我々は此自覺に基き益々奮勵努力して我校の進展を圖り女子教育をして益々隆昌ならしむることに盡瘁しなければならない。此自覺と此努力とあつてこそ始めて記念式の藥がきいたと稱すべきものである。祝賀會の餘興の面白かつたことや展覧日の賑はしかつたことなどばかり頭にのこつて何の自覺も高まらず何の努力も生ぜずとすれば折角の記念式も詰らぬものに成り了るであらう。どうかさやうなことに成らないやうに致したいものである。

□

藤井利譽

一、皇后陛下の特別なる御思召により伏見若宮妃殿下の臺臨を拜し優渥なる令旨を賜はる、皇恩洪大、唯々感泣、倍々奉公の誠を輸さんことを誓へること。

一、四十年は學校の永久の生命から見れは長いとはいへぬが毅然としてかく混亂せる思想界の外に立ち世の毀譽に超絶して一意女

子教育の爲に盡し來つた事實は顯著なる本校の功績にして何人も之を否定することが出來ぬこと。

一、四十年間に養成した二千有余年の卒業生が操守堅實直接間接に國家教育に盡粹し而かも我が女子教育の中樞となつて今日の女子教育の進境に寄與しつゝあることは慥かに本校の誇りであること。

一、學校の經營の爲生徒の教養の爲多大の勞苦を費されて光輝ある我校の歷史を賑されたる先輩諸賢に對して衷心から敬虔感謝の至りに堪えぬと同時に吾人將來の責任の大なることを深く感ずること。

一、以上は私が四十年記念式に逢ひて最も深く浮べる感想であること。

□

下田次郎

明治三十七年に創立三十年の記念式及祝賀會が行はれた、その時もずいぶん盛大であつたが、今度のは校舍もひろくなり凡ての仕構へが大きくなつたから一層盛大であつた。出來て見れはあれ丈たがあすこまでにする準備は長い事かゝつてやつたので並大底ではなかつた。學校のきまつた仕事の外、かういふ特別な事をもくろみ、準備し。實行すると云ふ事にまた生きた教育的價値があると思ふ。どう云ふ方法で實行するか、どんな風に陳列するかまたは製作するかどんなに裝飾するかと云ふ事はつまり教育の生きた應用であり、又三日にわたれる實行は直接外の客にも接するのでいろ〳〵の練習となつた事と思ふ。それ故課業こそなかつたが課業以上の立派な仕事であつたと言つてもよかろう。あの樣な仕事を準備し實行するについては、あとから考へると手筈の十分に行かなかつたり、ぬけた所もあるが、それがやがてこの次にやる時の參考になる。かう云ふ事にかけて最も正確に緻密にやるのは獨逸であると思ふか獨逸流のやり方から見ればまだいろ〳〵手ぬかりな所手落の所もあらうと思ふ此度の戰爭なそでも獨逸かつよいのは。一は研究的で準備が十分出來て誤算かない、すべてか正確に整へられ割出されて居る點にあると思ふ。併し、隨分學校でも研究した故、大体に於てよくいつたと思ふ。

初日の式の如きも簡單で正味だけで順序よく運はれた、別に知名の士を招いて演說をたのむ必要もなし、吹聽する必要もない最も切り詰めた所で地味に行はれたのである。又生徒の進退がすこしも亂れなかつたのも平素の訓練、生徒の心掛をあらはすものと云つてよからう。當日　伏見若宮妃殿下御差遣になり、妃殿下より有り難き令旨を賜はつた事は、本校の光榮これに過ぐるものはない。又、その令旨の內に「皇后陛下遺範ヲ紹述シタマヒ方ニ女子教育ノ事ニ御心ヲ注ギテ更ニ將來ノ大成ヲ望マセタマヘバ諸員ハ宜シク益々奮勵シテ敢テ或ハ懈ル事ナカルベシ」と云ふ御言葉を拜する事を得たのは誠に有り難い事で女子教育に從ふものは大いに奮勵努力しなければならない事である。式辭、祝辭にいづれまさり劣りはなかつたが、戸野氏の卒業生を代表しての祝辭はよく卒業生の眞情努力を言ひ表はして、卒業生としての感し氣分が十分表はれて居た樣に思うた。

夜の職員卒業生生徒の祝賀會こそは、樂しく、なつかしく、思出

多きものであつた。余興の數々もいづれも面白かつたが、古い卒業者が誘ひつれて出て、或は雅樂唱歌をうたひ、或はむかしの遊戲（民草）をやられたのは、今の教育を受けて居るものに珍らしいばかりでなく、卒業生か數十年古の歌ひ方、手振り、足の踏み方までも覺えて居て昨日ならつたばかりの樣によくそろつてやられたのは會場の空氣か卒業生を昔によみかへらせて當年の生徒其のまゝの氣分にしたからであらう。中には白髮の人もあり、大きな孫もありそうな人かもとの若い氣分になつて、元氣よくやられたのは誠に感じの深いものであつた。これに對して現在の生徒はけおされてしまつて手も足も出なかつた樣であるのも面白い。畢竟學校が古くあれはこそ學校と卒業生との關係が密であたゝかくて卒業者か當年意氣を失はす學校に家庭に、その元氣を保持して居られゝばこそこれを見る事か出來たのである。恐らく職員と卒業者と生徒とか一緒になづて古きを語り斯樣に樂しくなつかしき會を催した事は、日本では空前の事であると思ふ。當夜は二百餘名の卒業者か出席されて、或は數十年遭はなかつた舊友にゆくりなくも出あつて、驚きと喜びとにつきぬ話しが方々にはづんた事であつたらう。

翌三十日の學校展覽會も嘗て例のない事で、天氣もよし珍らしくはあり、豫想外の多數參觀者かあつた。どの部も相當に準備が出來て參觀者によき印象利益をあたへた事と思ふ。明治紀念室も當日初めて公衆に開かれて、一時は入りきれないほどであつた、室には本校の寶とすべき貴重なる御品をはしめ、明治の鴻業進運を示す數々のものが陳列してあつたから、參觀者も定めていろ〳〵の思出に耽つた事であらう。第一陳列室には學校の歷史を語る種々のものかあつて、內外の人によほど參考になつた事と思ふ。古い卒業生の寫眞帖の前には當年の卒業生かつれだつて立つたまゝ動かずに話しあつて居た。要するにこの日の展覽會は十分豫期の効果を收めた事と思ふ。

三日目の講演會に於げる中村、福羽兩攝理についての講演は有益で、まだ世間に知られざる事を多く知る事を得たのは幸である。午後の音樂會は本校、高等女學校生徒の聯合で臨時教員養成所までも加つてやつた事は未だ例のない事で演奏者の意氣込も別であつたし聽衆もいつもよりは緊張して、熱した顏と耳とをもつてきいて居た、教師諸君の演奏は言ふまでもなく、生徒もあたへられたる時間の練習としてはよく出來たと思ふ。水田氏の獨唱はもはや黑人の域に達したもので、獨唱家として立派に立てる技能には感服の外なかつた最後の祝歌を澤山のヴアイオリンを彈きつれて全体でうたつたのは、最も大がゝりでこの三日間の儀式や會の最後を飾るものとして立派でもあり盛でもあると思つた。

斯樣にして數月前から待ち構へ準備し來つた本校開校四十年分立廿五年の記念式祝賀會は滯りなく成功を以て進行したのは、誠にめでたい事で之によつて受ける影響の、好ましく大なるものあるは言ふまでもない。我等は益々奮勵して各その本務を忠實につくし、本校引いては女子教育の今後の發展に大いにつくし度いと思ふのである。

（筆記）

□

小林照朗

本校の開校四十年の記念式に連るの光榮を得其の盛なる有樣を眼のあたりに見、又、その夜は祝賀會に出て卒業生及在校生の千人に近い婦人の方々の會合を見ては、我國女子の爲めに一種の感慨に打たれたのである。過去四十年間に於ける我國女子教育の變遷は、今更こゝにくだ〳〵しく述べまい、何となれば、それはこの紀念式に際して、本校から世に公にした略志に於てもその一班を窺ふことか出來、又、記念講演の際に於ける下田教授の御話によつても略々察する事か出來るからである。そこで私はこの際に於ける私一個の感想を述べて、今の御問に對する責をふさがうと思ふ。

私は一般女子に對しては、我專攻の教育學及社會學の上から非常に同情をもつて居る、で機會ある毎に女子の地位を高め、女子の社會に於ける價値を認め、女子に對する一般男子の同情心を促進し度いと思つて努力して居る。この點に於ては私は決して他の我國女子擁護の立場に在る人にゆづらないつもりである。されば此の際に於て私は、かゝる方面の事を繰り返す必要もないと思ふ。むしろいさゝかなりとも他山の石ともならうかと思はれる苦言を呈し度いと思ふのは、これまた女子に對する同情心から來るのである。

狹義に於ける女子教育は、我國は歐米に比して多少の遜色はありとも、なほそれほどではないと思ふが、廣義に於ての女子教育は誠に不十分と思ふ。この意味に於て私は、日本には女子教育ありしかも女子教育なしと言ひ度いのである。女子に對する學校は澤山設けられて居る。然して多くの女子がこれ等の學校に於て學んで居るといふ點に於ては我國は左程歐米に劣らぬ、しかしながら一旦學校を出た婦人が社會に出てから、婦人としてもしくは賢母良妻として男子と交はつて行く上に於て、智識の點に於ても活動の點に於ても歐米婦人に比して非常に遜色がある。本校設立以來こゝに四十年、故に或は今後四十年も經てば日本國に於ける中流以上の婦人は、今日とは趣をことにして或は歐米婦人に比して遜色なき事になるやも知れぬが、今日の如き狀態で進んだのではやり駄目であると思ふ。女の子かはじめて小學校へ入り、女學校へ入るその時に於ては、私は日本の婦人が男子に比してそれほど遜色ありとも見えぬ、併し、高等女學校を卒業する頃になつてから、否、高等女學校卒業後に於て急に我國女子の進歩かとまる樣に思ふ。これは一体誰の罪であるかと考ふるに、何人も咎むべきてなく全く日本社會か悪いのである。日本の社會はなほ女子を見ること四洋のそれの如く進み居らず、從つて女子も世間に順應する爲めにしらず〳〵の内に今日の樣な婦人となるにあらずやと思はれる。即歐米婦人は中流の家庭の人としても或は女子として職業ある人としても、とにかく一廉の見識をもち何事についても一通りは男子と話し得る、しかるにこの點に於て日本婦人はまことに劣るものと言ふべきである。社會かもすこし進んで女子の意見もきく樣になり、又、女子か意見を吐くのをきいて牝鷄かうたふなどいふ輕蔑の語で迎へない樣になつたならは今日の如き風は止むと思ふが、果してそれはいつになれは來るか回顧五十年までには來るか、否、六十年、七十年の記念日までまつても、その時か來るか、來ないか、私はそれを大いに疑問とするのである。社會の

悪風は悪風として勿論矯正せねばならぬか、かう云ふ際に生れた女子としてはもし私の言ふ事に誤りなくば、進んで社會がさう云ふ風に向く樣にしなければならぬ。それは決してむづかしくない、日本の一般女子、ことに中流以上の婦人がこの點を自覺して修養につとめたならば決してむづかしくないと思ふ、又、それが爲には何も女子か悪く高等教育を受ければならぬといふ事もなし乃至女子に對しての大學教育の必要もない。英佛獨等の大學の實狀を見ても婦人の在學生は男子に比して非常にすくない。それで私は必らずしも上の學校へ行かれば女子の自覺が出來ぬとは思はぬ、家庭の人となつても心掛け次第でいくらも修養の方法はあらうと思ふ。新聞一つ見るにしても、日本の家庭の婦人は直ぐ小説、講談に眼をつける、歐洲戰爭はどんな風になつてるか、支那問題は目下どうであるか、乃至日本の内閣は今だれによつて組織せられ、いかなる事が問題かと云ふ樣な事はこれらの婦人には殆んど風馬牛である、又、學校に於て新聞を生徒の閲覽室に備へても、小説講談を見る人は多い樣であるが、世間の時事に注意を拂ふ人は比較的すくない。これらは私の最も遺憾とする所である。又何か意見をきくと我々婦人風情がと直ぐ言はれる、謙遜して言はれるとすればそれも亦一つの美德であらうが、時と場合とによつては自己の意見を吐くことが必要であり禮義である場合もある。私は單に謙遜の德ばかりから來るのでなく、日本婦人が吐く可き意見を持つて居ないのではないかと思はれる。かゝる例を擧げればいくらもあるが、これを要するに、婦人の自覺をもすこし喚起したいと言ふ點にある。以上は一般婦人についてであるが中等女教員としても同樣の事が言ひ得ると思ふ。男子は中等教員になつてからも、なか〳〵勉學修養につとめるが女子もこの點に於て遜色かないであらうか、一考を煩はし度い。私は女子の位地は今より もつと高まり、婦人の人格がもすこし社會に重せらるゝ事を希望する一人として、男子の集會に於ては大いに女子尊重論を説くと同時に女子の集團に對しては亦我國婦人の自覺反省を促し度い、即私のこの言はこの度の記念の際に於て、我國高等教育を受けられる婦人の方々の過去の功績を思ひ、現在の盛況を見て、なほ此の上にも婦人諸君の上に幸あれかしと云ふ滿腔の同情と熱心なる希望との餘りいさゝかこの苦言を述べたのである。野人禮にならはず献芹の微意のある所を取られゝば望外の幸である。（筆記）

□

中島信虎

此頃は何かにつけて記念と云ふことが流行るか誠にに結構である併し、その多くは廿五年、三十年、或は四十年の紀念を行ふが、これはまだ明治維新以來年月がみぢかいから珍らしがつてするのであらふ、が一國としては三十年、四十年はさまで長くないから、祝つてもさしつかへはないが、將來はすくなくとも五十もしくは百と云ふ數字を紀念として祝ひ度いと思ふ。何かを紀念する爲めには丁度いゝ數字かなくてはならぬ故、理屈を通す爲めに十年を小記念五十年を中記念、百年を大記念としたらよからうと思ふゝ四十年記念も誠に結構ではあるがいかにも氣短かな國民の樣にも思はれる。やがて、五十年か來る故其の時は大記念をやつて、それからは十年毎に小記念をやつたらよからう。

附言するが、近時在職廿五年祝を方々でするが、苟しくも人か職を奉する以上、廿五年位つとめるのはさまで珍とするには足らぬせめて同し職に五十年もつとめた時は珍らしいものとしてよろこんでもよからうと思ふ。（筆記）

□

土屋弘

長い歴史をもつて居ると云ふことが、古い國にでも居る樣な一種の深い感じをあたへる。ことに記念日などに際していろ〳〵記念の事柄に接すると、一層その感を深くする。又平生の授業をはじめ一寸した仕事にしても一事一物、皆そのよつて來る所かあつて到底一朝一夕にして出來たものでなく、それ〳〵深い由緒をもつて居る樣に思はれる。從つて、新設の學校などとちがつてすべてに深重な力がある。かう云ふ長い歴史を背景として居ると云ふ事が、やがて學校の價値をますことゝなり、又、學校の訓育の上などに影響する事も甚大であると思ふ。この感じは何かにつけていつも起した事であつたか、今度の記念式に際して一層その感を深くした。（筆記）

□

近藤耕藏

「學生時代に大きな抱負を持たせて教育すると、後々までのびてゆく」祝賀會場でふと感じた。（筆記）

□

なにがし

本校開校後四十年間の前半は暫くこれを措いて、その後半のことについて一寸感じた點を述べる。明治三十二年に分科制度が實施される樣になつて、一般に學科の程度がすゝんだ、その後四十二三年頃までは特別な大變化はなかつたが、四五年このかた一体に變化を見る樣になつた、生徒に關してに以前にくらべてよほど開放に傾いて來た、勿論その間に一段の進歩を認めないではない。併し、日露戰爭以後社會人心の變化の著しかつたのにつれて、學校も自然その影響を受けた點がないでもない。日露戰爭以前と以後とを比較して見ると、生徒の思想の上などに於てはよほどの差異が認められる、一体この學校は、むしろ、世間に超然たる所があつて、社會から動かされる樣な事は比較的少ない。現今とても勿論さうではあるが、併し、全然社會と沒交渉であり得ない以上、やはりいくらかその大勢に支配され影響をうける事はまぬかれない事であらう。從つてその點に於て生徒の思想などに一部進歩のあとも認られるが、亦、所謂文明病の感染をまつたく受けて居ないとも言はれぬ。社會と沒交渉なのは國民教育の任にある者として大なる缺陷である事は言ふまでもないが、その爲めに却つて惡影響を受けるといふ事は、學校としてもよほど考ふへき事であり、又、生徒自身としても一層嚴に注意すべきであると思ふ。ともかく、今の生徒の氣風なり思想なりについては、あるひは、自分の本分と云ふ事について考の不確な點があるんではないか、すこし他にはしる樣な傾がありはなしいか。又、一

般に常識に乏しいと云ふ事は、社會一般の青年と同樣こゝの生徒にも見られる。大變高尚らしい事を言行する一面に、ごく〳〵あたりまへの事についての考がかけて居る。つまり學校は廣く全般の上から言へば進歩は認め得られるが、眞に内容を充實さすには後來大いに努力する所がなくてはならぬと感ずる。（筆記）

□

明、一二、佐方鎮子

先日の紀念式の式場に入つて強く感じた事は、開校當時の事でした其の時は　皇后陛下が行啓になりましてもとの第二講堂の正面に教壇が置かれましてそこに御座が設けられました。私共七十餘人の生徒が中央でその兩側に職員及來賓の方々がならばれました。其の時多くの祝詞祝文がありましたが女子では棚橋絢子先生が丸髷で祝詞を奉讀されました。四十年と申せば一寸の樣ですが過きて見ると非常にながく變つた事もたくさんあります。その頃の生徒監だつた關口、近藤、藤川などの諸先生は皆なくなられましたし。喜多見先生などまだほんの子供で生徒は皆唐人髷に結つて居ました。

まだ世間一般に女子の教育など殆んど有りませんでしたので生徒の中なそでも風變りな人もありまして、わざ〳〵男の樣にざんぎりにして居た人や、未亡人できりさげにした居た人なそもありました先生のなかでも、袴をはいてその上に白縮緬の帶をしめ靴をはいて居られる方なそがありました位でとかく學問なそする人には特別な人がありまして、今の樣に種々整頓した時から考へると夢の樣ですそれも入學後追々と普通になつて來ました。當時は今にくらべると學校なそもせまいものでしたが、それが却つて今よりもせまいと感じなかつたのによつても今日はいかに發展して居るかがつよく感せられます。

學科は物理、地理、歴史なそで國語といつては特にありませんでした、地理、理科の實驗機械なとも至て少く地理にも地球儀丈一つありまして漢學の先生から地球の事を御ならひしました。物理の教科書は物理全誌、物理階梯などて或時期には「格物入門」といふ漢文の書物を用ゐられたこともありました、歴史は日本のは國史竪要西洋のは泰西史鑑といふ大部の翻譯ものでした。學科はすべて教科書でした。その頃はまだ世間で學問する人のすくない時でしたから、する位の人は特に志を立てた人でありますので勉强の意氣込も自然强うございゐましたし、又さういふ人は少い時から家庭なでもその方面で特別に育てられた人が多うございゐましたので自然その點で普通より考へ方の度がちがつてました。教育の方針は賢母良妻主義でありましたがまだ社會か社會でしたので、一寸開けた樣にも見えた事でせう。

生徒は全國から集まりました中には縣から選拔されて縣費で入學された人もありました。寄宿舍は二階で最初は大變にゆるやかで自習室と寢室とが分れて北側か寢室と南が自習室でしたか、やかて豫科なそが置かれましてから追々せまくなつて來ました。寄宿舍の娯樂なそ全然なく。室長は校長から書付で命ぜられました。

その頃の土地の模樣は今とは非常なちがひです。校舍は今よりずつとせまかつたのですが道の方に六間位出て居りましたので、敷地は廣うございました夫故校内でよめ菜やつくしを摘むことが出來ま

したはるか向ふの駿河臺は一面にまつ暗にしげつた森で授業中よくほとゝぎすがなきましていゝきもちに眠りを催させたものです。勿論御茶之水橋はなく水道橋の方へ出る鈴木町の通りなそ書間さへ追はぎか出ると言はれる位で夜なども、たまに提灯のかけでも見付けやうものなら皆呼びあつて窓から眺めた位で、學校前もほんたうに人通りがすくなく神田に出るには万世橋の方からまはらればなりませんでした。其の頃を思ふととても今の樣な有樣にならうなどゝは思ひもよらなかつたのです。

私共と一緒に入學した人で唯今東京に居りますものか三十人位あります。年に二度位づゝ集まりますが皆子や孫やをもつて居る人で先頃も六十一の賀を祝つた人が二人ありますが、これからも亦追々增える事だろうと話し合ひました。年をとるほど學校や若い時が思ひ出されてなつかしく年に二度寄り合ふ事を大層なたのしみにして居ります。（筆記）

□

明、一七、後閑菊野

私か入學いたしました明治十四年は、その前年、即ち、十三年の校則改正によつて、學科の種類も殖え程度も相當に高められた際で誠に仕合であつたと存じます。それは、修身科が此時から下級より上級まで通じて課せられる事になり、新に、禮節科、保育科か加へられ、家政學、體操が必須科となつた事であります。國語は和文を非常に奬勵されました、其の上寄宿舍に於ての教育が行き届いてむつた事を感謝いたします。其の頃の教育の御趣旨は特に女子の貞淑の德を養成される事を勉められたやうに察せられます。十七年の二月に卒業をいたしますと、直に、附屬の小學校に務めさせて頂き、廿三年から高等女等校にうつり、廿四年から本校兼勤となりましてそれから三十年餘り此學校の御世話になつて、盛大になつた此學校の今日にもあふことか出來たとおもひますれば、只、有難いと申すより外はありませぬ。たゞもういつの間にか、年月を過き去りましたやうに思はれまして、驚かれるのみであります、併し子細に考へて見ますれば、隨分いろ〳〵の變遷を見ました事と今昔の感にうたれる事もあります。在學中女らしく、そして考へ深くと教へらまれましたのは、決して、失はぬつもりでありましたが、卒業の翌年からは、洋服を新調したり、舞踏會に出席したり、通勤の途中洋服で道をあるくのがきまりわるさに、人力車で往復したり、時々はさそはれて、鹿鳴館にもゆきましたり、今から考へますれば、實に、考へのないををしたものであるとおもはれますが、周圍の事情で移されるとは仕樣のないものであるとおもひます。併し、私共は極めて僅かの間しか、彼樣の事はいたしませんでした、時計の振子の右に一振、左に一振するごとく、世の有樣と學校の模樣も亦變りまして長らく棄てられて居りました禮節を再び課することゝなり、たしか廿七年に卒業なさいました級から私は作法を御教へ申したとおもつて居ります。卒業式の服裝が二十五年の方迄は洋服であつたのがこの一つ上の級から紋付の重ね物になりましたのを見ても、其邊の消息が分ります、廿二年の頃から袴を用ゐるの可否と云ふ事が屢々議せられまして、遂に之を用ゐることゝなりさてこそ、其の翌年の卒業生から今迄この有樣をつゞけて居るのでこざゐます。いつの時代で

も其の時は、最良をつくして居ると思うてして居る事も、あとから見れば不思議のこともあるのでありますから、何事もよく考へて、世の風潮をよそにすることの出來ぬのは勿論ではありますが、學校ではむしろ、指導者となる考で一歩進んだ事をして居たいものと思ひます。

以上は全くの外形について申しましたが、昔の生徒の心持はどうかと申しますと、それは實に、古い方ほどしつかりしていらつしやいます。私共常にこの點に於いて、先輩の方々に敬服して居ります學習された學科の程度は低くても、卓越したる精神を養成されていらつしやるのであります。又、私共時代でも勉強をまじめにした事他に心を奪はれず專心につとめたといふことだけは、誰も自信かあると思ひます。又、今一つは先生を有難いものに思ひ尊敬の心を深く持つて居りました事でこざゐます、特に舍監の先生方の如きは眞にむかあさまのやうに感じて居りました。卒業後勤めの方の御蔭さまで、何の苦もなく今日まで過しましたことを有難く存じます、いつまでも温かい親の懷に居るやうなものでこざゐまして、母校に殘していたゞいた嬉しさが、今更に感ぜられます。

「嬉しさを何につゝまむから衣袂ゆたかにたてといはましを」之が今日の感想でこざゐます。

□

明、二三、安井哲

去る十一月二十九日は本校開校四十年の記念日でありました。當日は畏くも伏見若宮妃殿下の御差遣を辱うしまして、其御前に於て嚴かなる式が擧行せられました。曾て殿下が英國に居給ふ宮殿下の御許に渡らせらるゝ御前、僅か數ヶ月の間さる御用を承るの光榮に浴して、折々參殿致した事のある自分は、數日前殿下の本校へ御來臨遊さるゝ由を拜聞して、有り難くも亦何となく御懷かしく覺に奉りましたのに、目のあたり尊く御美くしき御姿を拜し奉り、且御令旨を下し給へる御聲さへ明かにうかゞひ奉りましては、何となく胸塞がつて涙の出づるを禁じ得ませんでした。加之情ある方々の御取りなしで、思ひもかけず特に拜謁仰せ付けられし光榮、唯感謝の外は御座いませんのに、殿下には御にこやかに彼れ是れ御惠深き御言葉を賜はりまして、何と御答を申し上ぐべきかさへ辨へませんでした。かゝる御惠みに浴するのも亦此校に關係あればこそと眞に有り難く感じたのであります。

此日の午後は又職員生徒と卒業者との連合記念祝賀會がありまして、講堂は二百に餘る卒業者と五百に近き現在生徒とが相集つた盛んなる光景、今日のみは何となく職員が少數で勢まけがしたかのやうな感がしたのは妙でありました。卒業者にして職員たる自分は、暫らく此二つの關係から離れて單純な觀察者の位置を取りました。今こそ境遇上に差違もあれ、昔は同じ教室に學びし人々、又昔こそ上級と下級との區別もあれ、今は同じ卒業者として親しく此處に集まれる人々を見渡しますと種々なる感想が起こつて來ました。かかる人々は更に卒業の時代も忘れ、年齡の相違も忘れ、自分位置の相違などは固より忘れて、茲に學校を中心に、先生方を親の如く、孫にも似たる現在の生徒を妹の如くに思ひなして、樂しく打くつろひで居るのであります。私は之れ程深く學校と卒業者との關係を意識

したことはなく、又之れ程深く此關係あることを名譽とし感謝したことは御座いません。何等取るに足らざる私の如きも、此校の卒業者たるの故を以て實に多くの特權が與へられて居るといふことに、今更の如く心付き新なる感謝の念が起つたのであります。過去四十年間此處に學んだ人々は、吾校四十年の歴史を作りました、今後年々卒業せらるゝ人々に依つて之れが繼續せられて行くのでありませう。無限なるべき吾校の存在から見れば、四十は其の一小部分に過ぎませんけれども、其全歴史は實に過去、現在、未來の卒業者全體に依つて其大部分を作り上げるものであります。此意味から、學校を中心とした吾々は、何時までも一種離るべからざる密接な關係を其母校に有するものであるといふことを意識し、茲に深き意味を味ふことが出來たのであります。

□

明、二五、淺石ちゑ

私共が入學いたしました時は丁度先夜祝賀會で御話のありました塚本さん方の級か室長でした。その年憲法發布がありましたが先夜塚本さんは一面に銀世界でと仰せられましたが、私の頭にはその樣な美的な感じは殘りませんで、その朝宮城前に參列の爲め行きました時に、靴ぐるみどぶ〳〵な雪どけ道の泥につかつて、三寸位ずつと洋服の裾が泥まるけになつてこまつた事をよく覺えて居ります。

其頃學校での服裝は平素は洋服で外出の時は日本服でしたが故郷なぞへ歸りますと、下駄がよくはけませんで時々ころげますので母からよく笑はれました、非常な西洋心醉時代で下駄は二本の指で支へる故疲れるが靴は足全体で保つ故疲れないと云ふ樣な事を言はれて居ました、そのせいか今でも靴の方がよろしい樣です。外出の時は美人でなくとも束髪に帶でした、束髪はどこも結へずにぐる〳〵卷にしますので三四分かゝれは出來まして簡單でした、かなり西洋風か盛で卒業の時も洋服を作つて頂いたほどでしたが、鹿鳴館時代の最もハイカラだつたのには及びませんですから波佐谷先生など今でもスタイルかよくていらつしやいます、ことにあの頃は御作法も御ならひになりましたが、私共の時は絶對にさう云ふ事はなく生花や茶の湯は名さへも知りませず疊はざりがあらくてこまると云ふ事をよく云はれました。舞踏は体操として坪井先生から御習ひしまして、大變すきでよくいたしました、また其頃は正確にローンテニスと申しまして之も亦よくいたしました、まだコートがありませんでよく御隣の高等師範へ先生と參りました、洋服は私共の時はよほど簡單になりまして前にはうしろのあたりをふくらます爲めでいろんな道具を入れましたが、一切それをなしにいたしましたか、それでもなほ手のあげさげに窮屈ですから体操服としてはシャツを長くしただけの樣なものをきて縞の手製の細帶をむすんでいたしました、靴下はその頃必ず赤色でありました。

野口先生から家事を教はりまして、舞踏の手の取り樣化粧の目的なぞをまで教はりました、今もよく話の種にいたします。今もよくいたしますが私共も建築の圖取りなどを宿題に出されましたが、今の樣に世間には殆んどそう云ふものゝ例はありませんで大變めづらしくもあり經驗もありませんので、光線のまるで入らない室を二つもこしらへてバッドのBをつけられた事などあります。けれど大變

役に立つて卒業後家で普請をいたします時圖取をいたしまして大工に感心されました。また外にそういふ方がありまして、大變にいゝ事を御習ひしたと感じました、とにかく一新時代を劃した樣な氣がいたしましが、學科の方などは内容に於てのいかんはまづ置きまして種類なぞの點では大した變りはありません。

校長先生は最初山川先生で三年の時に分離してから中村先生になりました、先生からは講堂講話を時々伺ひましたが、その頃から中風症の樣な御樣子であられるのを傍に在て御親切に御世話なさる中川先生の御樣子を拜しますと、私共はどうしても深い感化を受けずには居られぬ位でした、一擧一動實に誠心精意から出て居ない事はない樣でした。卒業證書は細川先生からいたゞきました。

私なぞははじめて田舍から出て來てこの學校の生徒である事が非常にありがたく、無上の光榮と感じ先生の方の御言葉をきゝ御姿を拜する丈でも、只もうありがたくうれしくて、苟にもつまらぬなぞと云ふ事は思はれず、いつも幸福と感謝とを強く感じて居りました。私共の一年の時丁度安井先生なぞは三年生であられましたが、非常に御偉く見えて自分達もどうぞあゝなり度いと思ひました、何しろ安井先生方の當時の意氣といふものは實に大したもので、全く、覇氣天を衝くと云ふ風でした。一般に女子最高の教育を受けるものとして教育せられましたし、又、高嶺先生などの御示教を精神的にも強く御うけになつた樣に思はれました。いつも女子として社會に立つべきものとして訓陶され、圓熟した教育を受けて出られた樣であります。又、その頃はどうも學問をする女子は家庭から離れてしまふ傾があると大分言はれまして、細川先生からなぞも在家思想と云ふ講堂訓話を伺つた事があります。其の頃にはまだ世間一般に教育はすくなかつたので、私の故郷なぞでも今なら洋行でもする樣に考へ私自身も、一度郷關を出で事成らずんば死すとも歸らずと云ふ樣に思つて居りましたので、夏休に歸省を命ぜられて歸るのさへ、誠に本意なく思ひました、それに仙台まで汽車がありましたがそれから先は人車で秋田までゆられて行くので歸りますのもなか〳〵大事でした。この樣な風で私共の生徒の時代は社會からはとびぬけて先へ出て居りましたものですから、卒業後奉職いたしましても直ぐに生徒時代の事を應用すると云ふ事も出來ず、舞踏だとかローンテニスだとか云ふ事など一向知らぬ氣の樣子をして居ないと務めにくい有樣でしたので、昨日までは洋服姿でかけまわつて居たものを今日からは全く日本風に改め、髪もまげに結つてぞろりとした風をすると云ふ樣にして社會の風潮に調和しやうといたしましたものです。

先日の夜會はまことに久しぶりでまるで二十位の若さに返つた心持がいたしまして、大層たのしくなつかしい一夜を過しました、多分皆樣が同じ樣に感ぜられた事でせう。同級生と申すものはいつになりましてもなつかしいもので五年も六年も遭はずに居ても遭ふとやつぱり昔の樣な氣もちになるものです。私共の生徒時代憲法發布の祝賀會の折は男子の高等師範と一緒に立食いたしましたが、その時戸野樣の御夏人が生徒であられて、天照大御神になられて天の岩戸の所を餘興になさいました、槇山先生なども其時代であられました。

□

明、二七、　西島富壽

私共在校當時は井上文部大臣の頃で、國粹保存主義が盛に唱へられました。從つて學課としても國漢が重くみられ、作法も復興して後閑先生からおならひしました。又初は洋服を着て居りましたが卒業の時には和服になりました。

動植物は岩川先生に、化學は中川先生に、物理は村岡範爲馳先生におならひしました。當時の女子には物理學などはずゐぶんむづかしかつたのですが、私は地方の師範で、かなりむづかしいところを某教授から原書を通譯したまゝならつてきましたから、こゝではわりあひにらくな方でした、修身は倫理學といふものはなく實踐倫理で論語その他の經書類から適中した修身道德を伺ひました。國語は本居豐穎先生、三上參次先生、三輪義方先生などに教はり、漢文は南摩先生にお講義を伺ひました。當時は時々課外講演があつて論語を岡松雍谷先生に、源氏を小中村清矩先生に伺ひました。この樣な時には全校擧つてこれをきゝ、又男子の高等師範の先生方も傍聽せられました。武田錦子先生には英語と教育學を教はりましたが、後には、教育學は篠田先生となりました。體操は坪井先生、家事は後閑先生、地理、數學は野口先生に教はりました。當時は今日の如く教科書が備はつて居りませんでしたので大方に教授せられたものを筆記しましたが國漢文の書物などは學校から皆貸して下さいました。その頃、柴宮先生が今の荒井先生の樣にお若くて圖書係をして居られて、學年はじめの幹事にあたると、いつも級の人數だけ本を拜借にゆきました。それらの事も今ではなつかしい思出の一つであります。學用品もやはり學校から頂いき、今日のノートは駿河半紙の罫紙の帳面でこれに晋唐小楷といふ筆記用の細筆と墨壺とを携帶して教室に出て平假名交りに筆記したものでした。

此時代の學校は分立當時でありまして校長中村先生が廿四年御他界になり、細川潤次郎先生がおつぎになりまして規則も改正せられて、分立後の基礎を建設する時代であつたと思ひます、この時教頭は村岡先生で幹事は現校長中川先生で、着々諸種の計畫を實行せられたやうに思ひます、生徒は四組合せて九十五人位のものでした。

當時女子師範の廢止問題が起つて居りました、これは女子に學問をさせると家庭に不向になり、又、家庭にはいることを好まなくなるからといふわけでしたので、學校でもいろいろ御心配で、一方には良教員たると共に他方には賢母良妻となる樣にと教へられました今でも圖書室に掲げられてある橘逮成の娘、楠正行の母、松下禪尼、山内一豐の妻の四枚の額はこの時代に作られて、修德の模範としてもとの講堂に掲げられたものであります。生徒の方でも、どうかして立派な人格をつくらうとして、皆なが苦心し偉い人の傳記を讀んだりなるべく德の高い人に接近したり、又、土曜會のお話などもたいていい修德に關するお話でした。極めて單純ではありましたがとにかく相當の程度で日本女子としての理想教育家としての理想が心の中に出來てゐて、常にその方向に進んでゆきました、當時お互の理想はほゞ同じで、理想の人物と認める人もたいてい一致してゐました、今に較べたら勉強するにもずゐぶん不便なものでしたがその間を切りぬけて進んだせいか、よほど堅實なところがあつたと思ひます、殊

に其時代の師範生徒は地方に於ては公費、こちらでは官費で、衣食住より教育全般に亘り國家の負擔によつて養成せられて入學當時身體さへ持つて行けばよいように、丁度今の兵役につくやうでありましたから、どうかして國恩に報いればならぬ、國民の汗によつて得た費用で教育された御恩に報いればならぬといふ感じは、非常に強くありました。修學時代の寒さ暑さ其他の勞苦も一切この事を思ふ時は忍耐したものでありました。

四年生の時はじめてテニスがはいつてきて、今の竹の寮、梅の寮あたりは廣い芝生の運動場のあつたところに、コートが造られました、しかし當時は女子らしくといふ主義で、晝休みの運動時間などにもたゞぶら〳〵と散歩してゐる位でしたので、これはあまり歓迎されませんでした、その頃身體の事についてはあまり考へられなかつた樣ですがこれは一つは皆丈夫な人ばかり集つてゐたからでもあるでせう。

日常の生活についてもいろいろの思ひ出があります。廿三年の國會開設の祝賀會には級々思ひ〳〵の餘興をしましたが私の級では黑い大きな貝を作り之が貝殼が開けて其中から種々の海中動物がゾロ〳〵出かけて會場を一周しました私は鰯にあたりまして小魚ですから顏のかくれぬを耻ぢた事がありました、あのやうな魚類を以て今日の議員諸君に擬した事は失敬の事です、けれども其時は何の考もなくしてしたものであります。山川、安達、福田の三先生が舍監で夏冬ともに羽織を召し、切下げでゐらつしやつてそのまゝ姿で夜會の終りなどにはプロネードなどにもまはいりになりました。外出についてはなかなか嚴重で、外出簿を持ちあるいて出先の家で到着退出の時間をつけて捺印して戴きました。何處へいつても遲刻の心配があるので二時三時になると歸り仕度をしたものであります。日曜日の外にも買物の外出日がありましたが、門限が心配で私などはあまり出ませんでした、門限の十五分位前になると室長が室友を調べてもしまだの人があると門の處で待つてゐて、遠くから見ゐると手招きして引張り入れた位でした。當時お茶の水橋はまだかゝつて居りませんで、駿河臺の涯は一帶の森で今の瀨川博士のお屋敷のある邊の涯にはことによい櫻の木がありました、花の頃は美事でありました。

行啓は廿五年、廿六年と續いてありました。廿五年の時には南摩先生の漢文教授を御覽に入れ、又講堂で體操をお目にかけました。御座所近くでドンドンと體操をして、今から考へると畏れ多い事であつたと思ひます。御前講演は細川先生の「楠氏の母」に就てのお話でした。これは「菜橋錄話」に載つて居ります。この時の御下賜金で土佐日記を和本で版行し、本校生徒に頒かたれました。これには細川先生の序文がついて居ります。廿六年の時には私は附屬の女學校で授業を御覽に入れる光榮を擔ひました。この時の御下賜金では、「女四書」をやはり和本で版行し、細川先生の序文をつけて戴きました。

私は信州から出てきましたので、私自身としては珍談も少くありません。一年生で病氣をしました時、室長さんが枇杷を買つてきて下さいましたが、私は初めてみたものですから、一體食べるものだか、それとも觀るものだか、一寸わかりませんでした。初めて蠶豆がおかずについた時も、かたい皮をがまんしてたべて、あとで

他の人のをみて皮を出すものだと氣がついた事もあります。在學中廿四五年頃か飢饉があつて國内一般に金融必迫貧民の窮狀は非常であつたと申ます、幸に私共は例の官費で米の價も知らぬのでしたが一時は舍監の御注意で、南京米を交ぜてたべました、寄宿舍でも色々節約をし、自分達の飲食物のうちより何とかして廢物になるものでも集めて貧民に施したいと思ひついて香物にかけた、醬油の小皿に殘つたのを集めたり、むかづのこりを集めたりして、下谷の萬年町あたりへ施しました。僅かづゝの醬油のしたゝりが積れば大邊のもので　三日位で三合のビール罎に一杯位出來ました。

私共の給與された被服費は寒暑相當の衣服を作つて頂いて、猶卒業式服の分もありましたので、紬の紋付地は現品で給與され其他は金で渡されました、額は覺えて居りませんが少々足して帶や長襦袢などを作りました、同級生は沒したものもありますか、現在十四人其内家庭にあるもの七人務めて居るものが七人あります、このお話は今日から見てざつと二十年前のことで其後は制度文物すべて長足の進歩を示してほんに隔世の感があります。開校四十年分立廿五年卽ち其分立當時一年生であつた私がこの記念日に當りまして一層感じが深う御座います。（筆記）

□

明、三二、　岡田みつ

私が生徒だつたのは明治廿七年から三十一年の春までゝしたが、その頃はたゞどこまでも温順しくちつとも生意氣な所があつてはならぬと云ふことが教育の主眼であつたのです、ですから次に御話しする事なども皆その證明になるのです。

服裝はその頃前の制度の後をうけて上級の四年生と三年生とは洋服で二年生と私共一年生とが和服で兩つがくつきりちがつた樣子をして居ました、まだ袴ははじまらぬ時で、一體に非常に質素で地味でなるたけ眼につかぬものをとよく〳〵注意されましたので、赤いものなど殆んどつかはずもし一人位つかふとそれが又非常に眼につきました。その頃は被服費といふのがあつて、單衣、綿入、襦袢、帶などにかく一通りは給與されましたので、生徒監が年齡に應じて一々見立てゝ下さるのですが、其の地味さといつたら、私なぞ今でさへもとても着る氣になれない位です。ですが家から持つて參るのでも相當に地味なのをするのですが、それでも一應生徒監に御覽に入れると、「これぢやあすこしネー」なぞと言はれる位でした、東京は比較的はでなので私共はことにやかましく言はれました、着物の方はさう云ふ風に地味な木綿でしたが、帶はと言へば必らずかたがは黑繻子でしたので、其の頃非常にはでゞあつた附屬女學校の方の生徒との對照が面白うございました、そんな風でしたので幼稚園なぞでは時には附添とまちがへられる位で、質素を通り越してむしろきたならしいとさへ言はれました。併しそれが一般の風ですからすこしでもはでにしますと、周圍から非常に眼をつけられます故それををしきつてするにはよほど勇氣がないと出來ませんのでそれはもうずいぶん質素な地味な風をして居りました。

この樣な一種特別なごく〳〵陰氣くさい時でありましたが學科の方もやはり同樣で、私の入學した年から、英語が隨意科になつて英語をせぬ人は國漢の方を各自に研究して級がふた手に分れて居ました。一體に英語をしない人達の方がうけがよく英語などは殆んどすてられて居る位でたまに英語なぞつかはうものならそれこそ大變なものでした。

平生の外出なども、なるべく人の眼に立たぬ樣にと注意されます、講演なぞも時折知名の方を招いてきく事はありましたか、外にきゝに出ると云ふ事なぞはありませんでした。日曜以外の外出は出來なかつたのを中途から一時間外出、二時間外出と云ふやうな事がやつと出來る樣になりましたがそれとてもたしか毎日ではなかつたと覺えて居ます、しかも必らず同伴者があつてそして帳簿へ時間を記入しました。修學旅行なぞは全くなく、教生時代の參觀旅行さへ私の級丈は出來ませんでした。それでも博物館なぞへは一二回參りましたが、それさへ、御つれ下さる先生がまだ若いからといふので御年をめした生徒監がちやんと御つきになるといふ有樣でありました。こんな風で萬事にめだたぬ樣、生意氣に見えぬ樣と注意されましたので、私共の入學した頃の上級生などほんたうにしとやかてちやんとして居られたので一寸近寄れないほどにまで思はれました、教生になられてからなぞ四年の方は皆教生室といふのに居られるので室長さんが「御用が御有りだつたら教生室にいらして下さいネ」なぞと言はれても一年生の私共にはなんだかこわくてなか〳〵入れない位でした。今でもその時代の人にはその風が殘つて居て、やつぱりしとやかでれとなしい人か多うございます。

其頃は入學後一學期の間試驗生といつて假入學なので、皆御めつけが自分についてでもゐるやうの樣にちいさくなつてれど〳〵して居たものです。ですから最後の時間に体操なぞの場合はそのまゝすぐ御風呂に入つてあたゝまりませうなぞと思つても「でもまだ四年の方も御入りにならないのにそんな事すると、一年のくせに出過ぎてるなんぞつて言はれますよ」「そうれー」なんぞといつてそのまゝ圖書室なぞでふるへて居ると云ふ風でした。それ故私の級なぞは教室へ出てもれとなし過きる位で別に質問をするでもなくだまつてはかり居ました、そのくせ蔭ではなか〳〵御喋べりもするのですですから或時など先生から「そんな意氣地のない事ではだめだだし〳〵先生につきこむ位の元氣を出せ」といつてしかられた事なぞもあつて、一時興奮して元氣を出して勉強した事もありますが、一体に外へ向つての大變な抱負なぞもなしに、只れとなしくさへして居ればとそれはこつ〳〵と勉強ばかりして居ました、國語なぞ大變に熱心で調度や服裝の事なぞずいぶんよく調べたり女官の衣裳などは皆一生懸命に畫いたものです。英語をして居るものでも英語なぞつかはないのは勿論よほど言ふ事なぞに氣をつければならず、宗教上の事なぞは固より讃美歌の節丈をつたものでさへ大禁物でした。

けれども卒業頃にはさすがに、これは前時代に對する反動の涙がどん底にまで來たのであらうと氣づかれもし又、御互に話し合ひもしました。それ故その頃からそろ〳〵そういふ氣運の一轉しやうとする兆が見え出しました、といふのは、卅年には安井さんが留學をせられた事です。これは中絶後第一回でしたがこの事なぞは一般に強い刺戟をあたへた樣です。又その翌年からは分科制度になつて前よりも專門的になると云ふことでありましたがそれなぞもやはり一つの兆であつたろうと思ひます。とにかく私共の時代は前時代の反動の最も極にまで達した時で、唯々おとなしく地味にと云ふので、ど

の時代よりも一番沈んで居た時と思ひます。（筆記）

□

明、三三、文　馬上てる

天皇陛下御即位の大典を擧げさせられ萬民等しく御代萬歳をことほぎ奉るこの御めでたき時に當りまして母校が創立四十年祝賀式を擧行されましたことは私共卒業生の身にとつて此上もないよろこばしいことであります。かしこくも　皇后陛下の思召しにより特に台臨たまはりました　伏見若宮妃殿下のいとも優渥なる令旨を拜承いたしました時にはあまりの有り難さに思はず感涙にむせびました。みがかすばの御歌を奉唱しました時には今更ながらいふべからざる一種の感にうたれました。

盛大なる祝賀會に臨みました時には實に今昔の感に堪へませんでした。まづ今回の式場となり會場となりました講堂は私の爲には最思ひ出の多い記念物でありまして私はこの講堂と一年間自習室として親みました譯であります。この一年間には學科生の時期もあり教生の時期もありましたがれほけた顏を寒風にさらしながらここを掃除したこともあります。スートブ會議に土曜の夕をのどかに過したこともあります。遇番となつておまはりの時今もそのまゝの電氣のスイッチを閉ぢやうとすると安達先生に「そらおばけー」とおどかされまして内心はぶる〳〵ふるえながらわざとそり身になつて強いふりを裝つたこともあります。又こゝで卒業生諸姉のために送別會を催しましたのは私共同期のものが最初であります。今のピヤノのあるあたりに大船をつくりまして其の中に卒業生諸姉を招し「行け三十一闔秀乾坤到る所今正に春なり」など吟じましたのはいまだ記憶に新しうございまして十數年の昔とは思はれません。土曜會も度々こゝで開きました、ある時の餘興に「當校も追々發展して世界の國々から留學生を送らるゝことになりました」と前おきして種々の裝ひをした假裝行列がありましたアメリカ人もシヤム人も其の外いろ〳〵あつたと思います。その時に時の舍監の安達先生は紙片に「號令もワンツースリーとかばるなり降るあめりかにかさもさゝずて」と認めてお近くに居りました私に御示しになりました。當夜の假裝行列を見てかゝることも思い出られまして御他界遊ばされました師の君方の御上御したはしく懷舊の情に堪へませんでした。

次に祝賀會で催されました各種の演技でありますがいづれも〳〵まことによく出來まして心から敬服いたしました殊に各時代を現しました假裝行列はいたく感服いたしたのであります、その中でも最頁目かは知れませんが私の一時代のが一番よく出來て居たと思ひます。

昔御薫陶を受けました諸先生方の益々御すこやかで昔のまゝの御温顏を以て御列席になつて居りますのを拜しましては今更のやうに御うれしく御なつかしく自分も全く昔に若かへりましたまだ〳〵所感は盡きませんがあまり長くなりますからこの位にいたして置きます。

□

明、三六、文　飯沼しづ

御茶の水の生徒は内的にも外的にも近頃追々變つて來たと云ふこ

とを、きくともなしに折々きいてましたが、先夜の祝賀會の樣な場合に御一緒に居つて見ますと、全くさういふ氣がぜられずにやはり自分達の頃とすこしも變つて居られず、どこまでも健實であり素朴である樣に思はれました。それ故すべてが實質的で浮薄な嫌味がなく人としての精神的の輝が十分感ぜられました。

又、あの會に列席した私共としては、當の樣な殊更めいた氣分なぞ微塵もなしに、全く安心しきつたおだやかなありのまゝな心持でたのしく嬉しく過すことが出來ました、御互に形骸をはなれて眞にこゝろとこゝろとが接しあつて居るあたゝかい精神的の會合でした。又、先生方が一視同仁に眞に隔なく御話し下さるのも大變にうれしかつたし古い方々の御話なぞももつと〳〵澤山あつて欲しいと思ふ位面白うございました。隨分知らない方にも御あひしたのですが決して他人といふ氣がせず皆同じなかまの方々だといふ親しい感じを強く覺えました。そしてすつかり若い當時の心もちになつてしまつて、眞に若いものの樣な樂しさなつかしさをもつて過しました。

私共が生徒の頃は上つらな事をさけて堅實になり度いとつとめて居ました、で國語にせよ歴史にせよ眞理をきわめて眞の美といふ點に到達し度いと望んで居ましたが全體としては平凡でした、一體に責任の感は強い方でした、別に社會思潮の影響を受けるといふ樣な事はなく、むしろ自ら超然として世の先覺者たるべきであるといふ意氣はかなりに持つて居ました、よく言へば温堅で惡く申せばやゝかたくなであつたかも知れませんが、とにかく精神修養には相當に力をつくしました。宗教方面で教會に行つたり佛教家の話をきくと云ふ風は多少ありました。生徒監のせられる事、寄宿舍の規則といふ事に對しては、當然しかるべきものとしてあやしまずすこしも壓迫を感じませんでした。又、私共頃の師弟の間は形式的であつて上下の隔が歴然として居ましたが。今は非常に代つてその間は殆んど平等的で人と人とが平等の位地に於て接しあふ事によつて精神的に得る所がある樣にと要求して居る樣に思はれます。小學校などにもやはりこの傾向があると見えて先日も子供達が「ゆきちやんの先生は御友達だからいゝなあ」と申し合つてましたがこれなどその間の消息を物語るものと思ひました。（筆記）

□

明、四一、理　池田トヨ

六十萬の同胞、滿腔の誠意をこめて登極の御大典を奉祝し、聖壽の萬歳寶祚の無窮を壽ぎまつる此秋、又、更に私共は榮と喜びとにみてる母校創立四十年記念日を迎へることを得ました。

廿九日の記念式に忝くも　伏見若宮妃殿下の御來臨を仰ぎ、一種云ふべからざる感にうたれ、其の夜の祝賀會には姉妹打ちつどい和氣藹々として歡をつくし、卅日の全校公開には其の凡てに於て大規模なるを今更の如くに思ひ、更に一日の御講話によりて母校の昔と今とを知る。斯く現に此三日を過しては「創立四十年紀念」なる響は實に簡單なるものではありません。

早くもも四十年の昔に於てその根さしをかため、年々のあらき風にも雪にもひるまず、年々に花開き、開きてはみのり、みのりては散じ、かくて百年千年其綠ます〳〵深からんとす此母校。いかで其

過去を悅び前途を祝はずに居られませうか。紀念祝賀の此三日實に意味なきものではありません。

此榮あり輝ある母校を祝すると共に多年萬難を排し、これをしてかくあらしめられし先生方のその御苦心と御努力とは如何ばかりなりしか私にはとても〳〵想像もつきません。

あれやこれを思ふにつけても、四年を其懷に抱かれ今も尙其惠みに浴しつゝある身はいかに幸でありませうか。願はくは微力なりとも雖も己の最上をつくし、國恩にあはせて校恩師恩の片はしなりとも報ぜんものと一しほ深く感じました次第でございます。

□

明、四三、理　星　キ　イ

私が卒業しましてからまだ六年目ですが、それでも今と較べてみますと、色々變つて居るところがあります。

寄宿舍でも、その頃は講堂が全体の自習室になつて居りまして、各室は皆寢室としてつかはれて居りました、寢室内では勉强が出來ないことになつて居りましたから、試驗頃にでもなりますと、朝早くから寒い講堂の外に、お掃除のすむのを待ちかねて居つた事なども思ひ出します。正副二人づゝの自習室長が各科の四年から選ばれて、自習室に關するすべての事を取締つて居りました。自習室内では勝手な談話は出來ないことになつて居ります、別に、講堂の後にある三つの室が音讀室になつて居りました、寢室にはたいてい十六人位居り、そのうち四人位は四年で、皆室長でした。

時間は大層嚴重で、五分後れたら食堂に這入れないことになつた時もあります。外出でも二時間以内の買物の場合は別ですが、訪問の時には保證人の印をいたゞいてきました。門限外の外出は絶對に出來ないで、まして夜間外出などは猶更のことでありました。しかし在學中二三度先生に連られて夜外出をしたことがあります。最も印象の深いのは、四十年の上野の博覽會の時、イルミネーションをみに行つた時のことであります、初めての夜外出で實にめづらしく嬉しく思ひました。

お菓子などは寄宿舍では頂けないものだと思つて居りました。一年の終りに四年の方を送る時初めて、お許を得てお室で會をしました。尤も冬休みなどには食堂で頂いてもいゝ事になつて居りました又ふだんでも御飯のあとには時々つきました。お菓子を小包で送つてきたのを、生徒監の方でおあづかりになつて、日曜日に保證人のところへ持つてゆく樣にと言はれた人もありました。

運動は今ほど奬勵されないで、あの寄宿舍の側のテニスコートが一つその頃からありましたが、多く上手な人ばかりがして、普通の人はあまり出ませんでした。しかし体操はやはり一週三時間あつてなかなかしつかりやりました。又、如蘭會の催で一年に一度位、幼稚園の庭などで運動會をいたしました。運動場は今の樣に廣くありませんから、徒競爭といへば講堂の周りを駈けたものです。

遠足は試驗休や學期のはじめなどにしましたが間にはあまりしませんでした。その頃はまだ京坂旅行はありませんこれは私共の二年位あとの級からはじまつたかと思ひます。各科の旅行はありましたが、私共は秩父旅行がありますから、日光へはゆかれませんでした三崎旅行はずつと前からあつた樣で、今と同樣最も樂しい旅行とい

はれて居りました。春秋二回の郊遊會もずゐぶん待たれたものでありました。

讀物は一般に少かつたと思ひます。校外の講演會などにも、たまに先生や上級生の方に連れて行つて頂く位で、あまり參りませんでした、圖書室の雜誌なども勿論今ほど多くはありません。しかし圖書は自由に自分で出してみることが出來ました。圖書室がせまかつたので試驗頃には早くゆかないと席がない位でした。

一般の氣風としては、何でも上の方から言はれた事はさうしなければならないものと思つてゐて、たまに不服をいふ人があると、吾儘だといつて排斥しました、生徒の方からいろいろ希望を申し出る特別のお願ひをするなどゝ云ふ事は絶對に出來ないものだと思つて居り、又、學校の方から生徒にむきゝ下さるなどの事はありませんでした。あの頃、四年生は半分先生位に思つて居りました、殊に私の二級位前までは、教生になると多くの人は紋付の羽織をきましたので、そんなせいでもあつたのでせう。

記念日に際しては感慨無量でありますが、殊に先輩の方々に對して深いなつかしみの情が湧いたのを嬉しく思ひました、先輩の方々も、皆、自分のうちへ歸つた樣にうれしさうに見えました、今更なから學校の有難さをしみ〳〵と感じました。（筆記）

□

明、四三、文　鹽　川　勤

一在校當時の學校に對する感想

極めてぼんやりして居つた

い　單に女子最高の學府に勉學し得つゝあることかうれしい

ろ　校長先生はじめ先生方に御世話になつてありがたい

は　澤山教へていただくこともうれしいけれどあまりすゝむのはまたつらい

一卒業して奉職しての感想

い　一から十まで大人扱ひにされて大層こまり、その困つた時にたよるべき所がなし自分でよきやう處置をつければならぬといふことになりはじめて、後に大なる擁護の力が直接に在校當時は存在して居つてはじめて、安らかであつたのであるとつくゞ學校生活當時の先生方の御恩澤を思ふ（勿論卒業後と云へどすべてに、後立てになつてはいたゞいて居るけれど小さなことまでとはゆかぬ）

ろ　在校當時の智識慾の不足なりしことの結果あらはれて悔悟の念身に迫まる（いつも不滿足の授業をせねばならぬのがつらいので）

一再び母校に生徒となりての感想

い「母校」、いかにもふさはしい名でなつかしい有難い所であると何とはなしに周圍の空氣か感じさせる

ろ　校長先生はじめ諸先生の鴻大はかりしるべからざる御保護御指導のもとに安らかに勉學し得ることの如何に幸なるかをしみ〳〵身にしみてはじめて心から其御恩澤を感じた私しと同じ丈け此感を有する人は少ないと迄思ふてゐる。

は　勉强は試驗か卒業證書とか云ふものゝためにするのでなくて眞に自分のためにするのであるといふことかわかつた。

□

明、四四、文　竹田みち

謹みて惟ふに　聖上陛下登極の大禮を行はせ給ふ今茲大正の四年は正に是れ我が東京女子高等師範學校創立以來四十年に當る曩に萬歳を歡呼して千古の大典を奉祝せる我校は今又　皇后陛下御差遣の伏見若宮妃殿下を奉迎し爰に盛なる創立四十年記念式を擧行す而して我等は其末に陪することを得誠に感激に勝へざる者あり

謹みて按するに日新之を盛德と謂ふとは是れ易の語なり今之を本校四十年の歴史に徴すれば日新の事蹟誠に歴々たる者あり、初め明治八年本校の創設せらるゝや、我國女子教育の嚆矢として生徒は新進有爲を以て自ら任じ、而して世間は又文明女子を以て之を歡迎し其一進一止は蓋し一般女子の模範たり、爾來日に成り月に就むの勢は駸々として已まず、僅々四十年の歳月を以て内は則ち母校教育の事業益々盛大に外は則ち千有五百の卒業生全國に赴任し、到る處育英の美華を開く是を以て本校の名望は東亞に隆々として世界列國皆刮目して、之を視るに至る嗚呼是れ豈本校四十年間日新の事蹟に非ずや、

而して其此に至りし所以の者は上は畏くも　昭憲皇太后陛下及び皇后陛下の女子教育を奬勵し給へる慈旨と下は當局大臣を始め校長教授の日夜盡瘁せられし結果にして一念此に至れば我等は屏營感激涕泗漣然として禁ずる能はざる者あり。

又謹みて按するに日進止まざるものは自然の勢なり、是の故に四十年後の今日を視ることは猶今日の四十年前を視るが如くなれば不敏我等の如き者と雖も仰ぎて日新の教を服膺し俯して犬馬の勞を竭し上は以て　昭憲皇太后陛下及び皇后陛下の慈旨を奉戴し進みて聖上陛下登極の御大典を記念し奉り。下は以て報本反始の寸志を四十年後に貽さむことを期せざる可からず、今回記念式に當り感激の餘謹みて一言を述ぶ。

□

明、四四、文　小田りよ

此度開校四十週年及び分立廿五年紀念に遭遇いたしました私共一同は、この長い歴史、この立派な歴史を、誠にあり〳〵とまのあたりに見、又、この意味深き變遷發達のあとを、實にはつきりと物語られた事を、うれしくありがたく思ひますと同時に、この樣な力ある立派な母校をもつて居ります私共の幸福と光榮とを深く感じました。

この樣にすくなからぬ歴史と、澤山の卒業生とをもつて居ります母校が、女子教育の上に、又、廣く社會全般にいたされた仕事は極めて大きく立派であると存じます。併し、その大きいと申し立派と考へます功蹟は、すべて過去に於てなされた事であり、又、私共の先輩によつていたされて居るものでございます。でその後をうけて居ります私共の務はむしろ未來にあるのでございまして、過去に於てなされた仕事が大きく又立派であればある丈、私共は將來に於て一層いたす所がある樣に十分努力いたさればならぬと存じます。此度この限りないよろこびに際しまして、いよ〳〵その感じを深くいたしました。（筆記）

□

明、四五、文　千葉安良

十一月になつてからは御大典の種々の御行事を承るとか拜するとか云ふことの爲に、いつも端殿な、ひきしまつた氣分で過しました一つにはそのせいでもありませうが、月末になつて記念式に際しましても、やはりこの限りないよろこびの中にありながら、有頂天になると云ふやうな事なしに、緊肅な力づよいよろこびを感じました從つて、御同樣この立派な歴史を有する是校を母校と仰ぎ、又、昭憲皇太后を初め奉り、近くこの度は、伏見若宮妃殿下より有難い御令旨を賜はるなど、重れ々々の幸福と光榮とに浴すると云ふ事によつて、深い歡喜の情と、それから生ずる必然の結果である強い努力の感じを覺えました。

嘗て在校中「讃美の生活」と云ふ一文を草した事がございますが、その時下田先生からたまはつた御批評の中に、「口舌の讃美は眞の讃美でない、只、實行によつてのみ眞の讃美はあり得る」とありましたが、今度のよろこびの如きもやはり自分としては、これを唯一時のよろこびとしてゞなく、多少なりとも將來の仕事の光ともなり原動力ともなるやうに、例へば、駱駝がその腹中に水を貯めて居る樣に、このよろこびが將來の仕事に對しての潤ともなる樣にと希つて居ります。

夜會の折は、在京の同級生が六人ともに揃ひました。その内、つい先日九州から出て來ました者などは、夢の樣な氣がすると言つて泣いて居た位でございました。一體、私共がちいさいながらも社會の一人として、職務に從事して居ります場合には、知らず識らず周圍から自我の確立を要求されます。それでどうしても緊張した人からつけこまれない態度をもつて毎日を送られねばなりません。それがあゝいふ時あの樣にして集まりますと、自然その武裝がとかれるものでございます。今年の卒業生送別の夜會の時、校長の送辭に「どこへいつても全力をつくせ、全力をつくして後の失敗ならばいつでも學校へ歸つて來い、學校は必らずあたゝかくその人を迎へよう」と云ふ御言葉がありましたが、私はその時この御言葉は直接自分に對していたゞいたのではありませんけれど、それでもなほ、この力強い母校をもつて居ると言ふことの幸福を深く感じましたが、先夜は一層軟かなよろこびの氣分の中に再びその感を新にいたしました私達六人はこの幸と樂しみとを自分達丈で占領するのはすまないと云ふので、一寸會場を出ましてみんなで女學校の教官室に參り早速その樣樣感想をしたゝめました。これは謄寫版にいたしまして直に發送しようと思つて居ります。又手紙をかいてゐる場合の心持などは全く在學當時に藤棚の下などをあるきながら、いろ〳〵な感激を語り合つた樣な生々したものでありました。

女子教育、學校の進歩などについての感想は、多くの方々と同樣であらうと存じますが、その中で唯一つ丈申し度いと思ひます事は此頃の本校の生徒方は、私共時代の生徒にくらべて、すべての物事にかゝづらひなしにすら〳〵と行はれるやうに感ずると云ふ事でございます。これはつまり人柄が進歩して居ると云ふ點であると思ひます。そのよつて來る原因を考へますと、私共時代のものよりはさばけた考をもつて居るからでありまして、そのさばけた考へは、又

本校生徒方の知的方面の修養の裕さから來て居ると同時に、私共よりも明るく育つて居られると云ふ所からも來ると思ひます。私はこの點を平生からよろこばしく存じて居ります。物事に對して左顧右盼の貌なしに、すら〳〵とすべてを行ひ得ると云ふ心持が、やがて勇往邁進の氣象を生み出すもとであると思ひます。又、その點から我々人類の知慮を無限に增加させる所の大きな努力が生じて來るものであると思ひまして祝福いたして居ります。（筆記）

□

明、四五、理　坂内　ミツ

四十年の長き歷史を持つて居る母校の光りは既によく理解して居る積りでございましたが光榮ある記念日にあたり壯嚴なる式場に列り一層其感を深うし自分等の幸福を感謝すると共に卒業生の責任の如何に大なるかを悟りました、又其夜會に於ては先輩の方々の懷舊談を伺ひ明治初年の變遷を目のあたり見たる心地して我國女子教育は勿論各方面に向て長足の進歩をなしたるに驚きましたと同時に其時代の教育、主義方針が生徒の上に及ぼす感化力の大なるを知り教育者の責任のいよ〳〵重大なるを深く感じました、漢學に重きをおきたる時代に教育されたる方、女らしく作法家事等を主とせられたる時代に卒業なされし方、西洋思想の入り込みて元氣旺盛なる時代に教育されたる方々が四十年後の今日に至るまで其生徒時代に與へられたる特徴に向つて活動して居らるゝことは何人も深く思ひ當られたことでありませう、又其餘興として卒業生の方々が昔の生徒時代の心にかへりて愉快に歌ひ談ぜらるゝを見て如何にも嬉しく有力なる多數の先輩を持つて居る幸福を感謝せずには居られませんでした私共後輩はよく本分を守り先輩の方々の志をうけてます〳〵光を添へればならぬことでございます。

思へば私ども在學中にも數々の變りがありました寄宿舍だけにしても大なる自習室は止められて寢室と同じ室になり一の側二の側と稱へたるものが新に寮名がつきました其外數へれば隨分ございます學校の方にはより大なる變化があつたやうでございます、創立記念七十年や八十年の祝賀會には是非出席して光榮ある母校を祝すると共に昔語りを致すこともあらうと存じます。

學校開放のことは私ども在學中より校長の御希望でございましたが此度實行されたのは誠にうれしいことでございます、初めて學校の內容を知りて驚かれた方もありませう、誤解を解かれた方もありませう、感謝された方もありませう、又特別室に陳列されたる寫眞等によつて懷舊の念に堪へない方もおありのことゝ思ひます、願くば各部の統一をはかり道しるべを明かにして入場者のすべてが小學校幼稚園に至るまで細かに巡觀して苦心のあとを認めて貰ひたいと思ひます、それには建物と建物との間の家內を充分にし其間にテント等の設備をなし手輕な休憩所を設くる必要があると思ひます、兎に角三日に亘る御祝は學校の歷史に於ても自分一個人の歷史に於ても特筆すべきことでございます。

□

明、四五、臨　栗本しず

私共は最初の一年間本校の寄宿舍に居りましたが、非常にうれしく感じた事は、入學當時室長樣をはじめ御室の方々が非常に御親切に一から十まですつかり御世話下さる事でした、私の入つたのは今の月の寮の二室で十六人でした、皆樣大變にいゝ方でうれしく樂しく暮しました。そういふ中で只すこし不滿に感じたのは何かにつけて本校生と臨教生とに隔にある樣に思はれた事でしたその頃追々寄宿舍もせまくなりましたので、それやこれやで揚場町の第二分舍に出る事になりました。丁度卒業生の方々と一緒に送別會をして頂きましたが、いよ〳〵出ると云ふ時なぞすいぶんの悲劇でした、私はこゝに規則の嚴格な中で上の人達から十分指導されて修養かしたいと存じましたのでその點から一層出るのがつらうございました分舍へ出てからはいまゝでの十分設備のある廣い所から來た者には窮屈で不自由で最初の內は、いやだ〳〵つて不平を言ふもので先から居られ、國体や家事の選修科の方々の氣を悪くさせたりいたしましたが、それもなれるにつれて追々よくなりましたし、それに伊澤先生が御家族全部で御ひきうつりになつて御親切に御世話下さいましたので、本舍とまたちがつた極家庭的なあたゝかみのある樂しい所に思はれて來ました。また金森先生か土曜日毎に御見えになりまして、實社會の有益な經驗談を御はなし下さいまして大變にいゝ精神的の糧を得ました。又土曜日毎に先生方を御まねきして、御習ひいたしました御料理をして一切私共生徒が準備して御批評をうかゝふ事なぞいたしまして大變有益でまた樂しうございました。又三年の時の暮の休みには寄宿に殘つて居るもの全部の御餅をすつかりつきましたが非常に思出ふかいなつかしい事でした、うすは御とりなりから、せいらうは本舍から拜借しまして、一反ふろしきにつゝんで私共が背負つて歸りました。各室で分担してつきましたがたいそうよく出來ましてそれであんびんをつくつて御重に入れて中川先生はじめ所々の先生にさし上げました所大變に御喜ろこびでございました。その後二階堂先生や江澤先生が御いで下さいまして一層活氣が出ますし、それに時々修養談や經驗談をうかゞはして頂きまして大變得る所がありました。外舍へ出たからこそと云ふうれしさ樂しさは時折神樂坂邊の賑やかな夜景の見られます事もその一つでありましたかなほそれにもまして大變にきもちのよかつた事は、一日置に御やつの出る事でした。御菓子や果物なぞが學校から歸るとちやんと御机の上にのせてあります、一日の課業を畢つてたのしく寄宿舍に歸つてそれをいたゞく時のうれしさは實に何とも言はれず、その爲めに一日のつかれがすつかりなほる樂にさへ思はれました。卒業前にはいろ〳〵と欲が出て御花を習ふとか袋物の稽古をするとかと云ふ風で一体に寄宿生活に通有な一種のかたくなな所はなくなつたと存じます。又、すこしでも家事上などにすぐれた所のある家庭の御話をきくと何とかしてつてをもとめて必らずその御宅に伺はせていたゞいたものです、今はとてもこんな勇氣はありません。

在學中の訓育的方面の事では、萬事に餘り大人視されまして比較的放任されて居ましたるとや、又、本舍に居りました頃なぞ余り人數が大い爲めに、人と十分知り合ふ事が出來ず、なほ生徒監と生徒とか比較的はなれて居る事なぞか大變にものたらなく思へました。

今の生徒の方々を見ますと、先日の夜會の折などにも感じましたが、外形の上では決して前と變りはありませんでやはり非常に素朴な健實な御樣子ですが、時折寄宿などにうかゞひまして見聞する皆

樣の思想の上の變化は、僅かに四五年の事ですが非常なものであると存します、大變に新らしく現代的になられて、凡てに元氣よくきびきびして來られた樣に深く感じます。（筆記）

□

大、二、文　大瀧　晴

曩に高等師範學校に於て四十年の記念式を擧行せられました、その當時からこの學校の四十年記念祭はもう五年の後、今の一年生は幸福だこれから入學する人は羨しいと云ふ、會話はいつも〳〵私共の間に繰り返されました。其の五年の年月は經つて今秋は愈々四十年の記念祭を迎へました嚴かな式や、盛大な祝賀會に列り陳列品觀覽の日の盛況を見。沿革に關する御高話を伺ふにつけこの四十年間の著しき進歩發展の蹟を懷ひ畏くも鳥恩鴻大なること各時代の職員の御盡力卒業生の援助に對して深く感謝いたしました、かくして校員全体は非常な刺戟を受け誰しも之を記念として一層の奮勵を期し覺悟をたしかにしたことゝ存します、私もまことに其の一人でございます記念日の後數日九州のはてに在る舊師の許より「光榮ある學校に奉職してゐるあなたの幸福を思うてうれしさにたへない」とありました私は之を讀んで勿体なさを益々深く感じました。

大正四年十二月廿一日印刷
大正四年十二月廿四日發行

（非賣品）

發行所　東東女子高等師範學校內
文科學術談話會

東京市赤坂區新坂町六十八番地八號
編輯兼發行人　千葉安良

東京市神田區旅籠町二丁目十二番地
印刷者　畑桂之助

印刷所　前同所
印刷所　廣業館
（電話下谷五五七番）

◎東京女子師範學校學術談話會規程

第一條　本會ハ本校生徒ガ平素學修スル事項ヲ互ニ談話シ智德ノ增進ニ資スルヲ以テ目的トス

第二條　本會ヲ文科、理科、技藝科ノ三部ニ分テリ

第三條　本會ハ本校生徒ヲ以テ組織ス生徒ハ其學修スル分科ニ從ヒテ第二條ノ三部ノ一ニ屬スルモノトス

第四條　本校卒業生ハ本會ノ贊助員タルコトヲ得

第五條　本會ハ本校教官ヲ請フテ客員トナス

第六條　本會ニハ會長ヲ置ク。會長ニハ校長ヲ推戴ス

第七條　本會ノ各部ニ部長一名ヲ置ク。部長ハ各員中ニ就キテ會長之ヲ囑託ス

第八條　本會各部ニ幹事ヲ置ク。幹事ハ各部所屬ノ會員ヨリ各級若干名ヲ互選ス

第九條　部長ハ談話ノ事項方法等ヲ監督指導スルモノトス

第十條　幹事ハ部長ノ指揮ヲ受ケテ各部ノ事務ヲ取扱フモノトス

第十一條　部長及幹事ノ任期ハ各一箇年トス

第十二條　本會ハ毎年一回總會ヲ開ク

第十三條　本會各部ハ各部ニ於テ行ヘル談話研究等ノ報告ヲ印刷シテ配布スルコトアルベシ

第十四條　本會各部ノ內規ハ會長ノ承認ヲ經テ部長之ヲ定ム

第十五條　第六臨時教員養成所及ビ卒業生ハ本校生徒及ビ卒業生ニ準ス

第十六條　本規程ハ會長ノ承認ヲ經ルニアラザレハ變更スルコトヲ得ズ

◎東京女子高等師範學校學術談話會文科部內規

第一條　本會ハ學術談話會規定第一條ノ主旨ニヨリ文科生徒ヲ以テ之ヲ組織ス

第二條　理科技藝科第六臨時教員養成所生徒ニシテ本部ニ入ラント欲スル者ハ其旨幹事ニ申出ヅベシ

第三條　本部ハ毎學期一回部會ヲ開クヲ例トス

第四條　部會開會ノ日時及次第ハ東京及近縣ノ贊助員及客員ニハ毎會之ヲ通知ス

第五條　部會ノ講演者ハ會員、贊助員、客員中ニ就キ豫メ定メ置クモノトス　但臨時ニ講演セントスルモノアル時若シクハ他ヨリ講演者ヲ招聘セントスル時ハ部長ノ承諾ヲ經ベシ

第六條　本部ハ毎學期凡ソ一回會誌ヲ發行シ學術談話會規程第十三條ノ報告ヲナス

第七條　本部ニ左ノ役員ヲ置ク其任期ハ各一ヶ年トシ毎年四月之ヲ改ム

評議員　若干名
編輯掛　四名（四年生二名三年生二名）
會計掛　四名（各學年一名ヅヽ）
庶務掛　四名（仝上）
評議員ハ客員ニツキ本部之ヲ依賴ス
部長ハ客員又ハ贊助員ニ事務ノ一部ヲ依囑スルコトヲ得

第八條　評議員ハ本部ノ事務ヲ商議ス

第九條　編輯掛ハ左ノ事務ヲ行フ
一、會誌原稿ノ蒐集
二、會誌ノ編纂

第十條　會計掛ハ左ノ事務ヲ行フ
一、金錢及物品ノ保管及出納
二、會計帳簿ノ整理
三、毎年三月末日ニ於テ前一箇年金錢出納ノ明細書ヲ製シ之ヲ報告スルコト

第十一條　庶務掛ハ左ノ事務ヲ行フ
一、通信、記錄
二、會場ノ選定及整理
三、講演者ヲ定ムルコト
四、會誌ノ發送

第十二條　本部會費ハ當分會員ハ實費ヲ贊助員ハ年額七十錢ヲ毎年四月ニ於テ納ムルモノトス

第十三條　本部ニ受領セル會費ハ本部發行ノ會誌ニ於テ之ヲ報告ス

第十四條　會費ノ未納二箇年ニ及ブ者ハ會誌ノ發送ヲ見合スコトアルベシ

第十五條　退會セント欲スル者ハ其旨幹事ニ申出ヅベシ

以上